

洗足学園音楽大学

邦楽第七回定期演奏会

とおる

「融」地唄と能

二〇一六年 三月 三日(木)

開演 一九時〇〇分 / 開場 一八時三〇分

洗足学園 前田ホール



洗足学園音楽大学

本日は「邦楽第7回定期演奏会」にご来場頂きまして誠に有り難うございます。本学では日本の伝統音楽の可能性を常に追求し、古典から現代、様々なジャンルとのコラボレーション等、その魅力を世に伝えるべく数多くのコンサートやイベントを開催しております。

一口に日本の伝統音楽と言っても、様々な時代様式の音楽が現在まで傳承されおります。今回は「融」^{とある}をテーマに地唄と能による演目を中心とした洗足学園音楽大学ならではの企画による演奏会です。一流の演奏者、演者による地唄と能のそれぞれの魅力をご堪能ください。

本学現代邦楽コースでは、次世代を担い、国際的にも通用する邦楽演奏家を輩出すべく、教育活動を続けており、卒業生は様々な音楽シーンで活躍しております。また本学附属研究機関現代邦楽研究所では、広く社会に開かれた組織として、誰でも学べる公開講座の開設やコンサートの開催、ワークショップ活動などを行っております。これらの活動を通じて社会に貢献し、音楽文化の発展と邦楽の普及に努力しております。現代邦楽コース学生、卒業生および現代邦楽研究所研究生、修了生がここに集結し、箏アンサンブルによる幕開け演奏も用意いたしました。

本日の演奏会を迎えられましたのは、これもひとえに御來聴の皆様方をはじめ、演奏家の先生方、裏方のスタッフ、大学職員の方々のご支援、ご協力の賜物です。心より厚く御礼感謝申し上げます。私達は日本の伝統音楽や伝統芸能を大切に、これからも世界に向けてその素晴らしさを発信して参りたいと存じます。どうぞ最後までごゆっくりとお聴きいただき、ご高評の程よろしく願い申し上げます。これからもどうか尚一層のご指導、ご鞭撻をお願い申し上げます。

洗足学園音楽大学 現代邦楽コース

プログラム

1 「千鳥幻想」 沢井忠夫 作曲

箏：野澤佐保子

産形典子	大出章裕	君澤朱野	今英里	大坂智子	齋藤葉弥	坂本知亜子
佐々木恵	志磨村英子	鈴木理恵	谷富愛美	土屋成子	長島たき子	
中根真紀子	畑文子	濱崎純子	松尾富子	森山知子	渡辺澄子	

十七絃：吉原佐知子

飯田智奈美	金井杉子	傍島香緒里	土屋百合子		
藤井礼子	堀越秀子	宮田美智子	安本和代	米山聖子	

2 地唄「融」 石川勾当 作曲・市浦検校 箏手付

三絃：芦垣美穂 箏：石垣清美 尺八：青木彰時

休 憩

3 能「融」より（後半部分）

装束附 舞囃子 融 舞返

シテ 融大臣：鵜澤久

笛：八反田智子	
小鼓：大山容子	
大鼓：佃良太郎	
太鼓：小寺真佐人	
地謡：西村高夫	鵜澤光 青木健一

曲目解説

「千鳥幻想」 沢井忠夫 作曲

昭和56年NHK委嘱により、正月放送の為にアレンジされた曲で、“古典の持つ歴史の重みと風格を現代に生かす試み”というNHKの委嘱主旨により、吉沢検校作曲「千鳥の曲」を箏と十七弦の二重奏として組み立てられている。十七弦に置きかえられた唄の旋律を含め、殆どが原曲に近いままおかれているのは、これを経て誰もが古典の良さを味わい、新しい箏音楽の原点を再確認出来るように考慮されているためである。1980年作曲。 [作曲者]

地唄「融」 石川勾当 作曲・市浦検校 箏手付

石川勾当作曲。箏は市浦検校の手付け。ただし大阪では絶え、京都の伏見に伝えられたものが、大阪及び九州にも伝わる。本調子手事物。「八重衣」「新青柳」とともに石川の三つ物の一つ。世阿弥の能「融」の後シテの出のサシ謡の後半からあとをそのまま歌詞としたもの。河原左大臣源融の遊狂と詠嘆に寄せての秋の夜の情趣が主題となっている。前弾は、三味線組歌の「揺上」に拠るが、九州系はやや短く演奏。最初の手事は、能の盤渉早舞に対応。あとの手事は二段からなるが、マワシ撥が多用されることで有名。ただし、九州系では二段のみ演奏。三絃は低本調子で出て、「さすや桂の・・・」から二上り、最初の手事で三下り、後の手事で本調子となる。箏は、半雲井で出て、平調子から中空調子。 [CD箏曲地歌大系より]

<歌詞>

あ^{まがき}の籬が島の松蔭に、明月に舟を浮かべ、月宮殿の白衣の袖も、
三五夜中の新月の色、千重^{ちぢゅう}振るや、雪を廻らす雪の袖。[合]
さすや桂の枝々に、光を花と粧ひ。[合]ここにも名に白河の[合]波
の、あら面白や曲水の盃、うけたりうけたり遊舞の袖。

[手事]

あ^{まがき}ら面白や遊楽や、そも明月のその中に、まだ初月の宵々に、影も姿も少きは、如何なる謂はれるらん。[合]
それは西岫に、入り日の未だ近ければ、その影に隠さる、たとえば月のある夜は、星の薄きがごとくなり。

あ^{とやま}青陽の春の始めには、霞む夕べの遠山、眉墨の色に三日月の、影を舟にもたとへたり。また水中の遊魚は、釣り針と疑ふ、雲上の飛鳥は、弓の影とも驚く、一輪も降らず、万水も昇らず、鳥は池辺の樹に宿し、魚は月下の波に伏す。[合]

あ^{とやま}聞くと飽かじ秋の夜の、[合]鳥も鳴き、

[手事]

あ^{とやま}鐘も聞こえて、月もはや、影傾きて明け方の、雲となり雨となる。[合]
この光陰に誘はれて、月の都に、入り給ふ粧ひ、あら名残り惜しの面影や、あら名残り惜しの面影。

装束附舞囃子「融」舞返 (能「融」より後半部分)

秋の夜、月光にうかびあがる「河原の院」。荒れ果てたこの邸宅は、過ぎ去ってしまった年月をあらわしていた。月に照らされた貴公子が見せる、二度と戻ることのない過去の栄華…。

作 者：世阿弥
場 所：京都六条河原の院
季 節：秋八月(旧暦)
分 類：五番目物貴人太鼓物

あらすじ

【前半】東国出身の僧(ワキ)が京都六条「河原の院」に着くと、汐汲みの老人(前シテ)が現れ、二人は河原の院の情趣をともに楽しみ、昔の源融の物語を語り、近隣の名所を教えなどしていたが、老人は汐を汲むとそのまゝ姿を消した。老人は源融の霊であった。【中入り】

【後半】夜、僧の夢の中に源融の霊(後シテ)が在りし日の姿で現れ、旧懐の舞を舞っていたが、やがて月の光に誘われるようにして消えていった。

今回は後半部分を上演します。

舞返

通常の演出では〔早舞〕を三段または五段舞うところを、〔舞返〕では、早舞の途中で、橋掛かりで囃子を聞きすますように竹む〔クツロギ〕が入り、またその早舞クツロギ五段を舞った後に〔急之舞〕を舞います。融大臣が舞いあそぶ趣を強調しています。なお、この小書がつくと、月光のもとで舞い遊ぶ融の優雅さを表現する演出となります。 [鏡仙会HPより参照]

融 後半部分の詞章

忘れて年を経しものを。またいにしへに帰る波の。満つ塩竈の浦人の。今宵の月を陸奥の。千賀の浦も遠き世に。その名を残す大臣。融の大臣とは。わが事なり。われ塩竈の浦に心を寄せ。あの籬が島の松蔭に。明月に舟を浮かべ。月宮殿の白衣の袖も。三五夜中の新月の色。千重ふるや。雪をめぐらす雲の袖。さすや桂の枝々に。光を花と。散らす粧ひ。ここにも名に立つ白河の浪の。あら面白や曲水の盃。うけたりうけたり。遊舞の袖。

<早舞>

あら面白の遊楽や。あら面白の遊楽や。そも明月のその中に。まだ初月の宵々に。影も姿も少なきはいかなる謂なるらん。それは西岫に。入日のいまだ近ければ。その影に隠さる。たとへば月のある夜は。星の薄きがごとくなり。青陽の春の始めには。霞む夕べの遠山。眉墨の色に三日月の。影を舟にもたとへたり。また水中の遊魚は。釣り針と疑ふ。雲上の飛鳥は。弓の影とも驚く。一輪もくならず。万水ものぼらず。鳥は池辺の樹に宿し。魚は月下の波に伏す。聞くと飽かじ秋の夜の。鳥も鳴き。鐘も聞こえて。月も早。影傾きて明け方の。雲となり雨となる。この光陰に誘はれて。月の都に。入り給ふ粧ひ。あら名残り惜しの面影や。名残り惜しの面影。

プロフィール



芦垣美穂 (三絃)

東京藝術大学卒業、同大学院修了。1974年「箏三絃リサイタル」開催、1975年「一穂会地唄箏曲演奏会」開催、共に以後20回を数える。東京藝術大学音楽学部講師(1980～2003年)。人間国宝菊原初子師に師事、箏組歌・三絃組歌全81曲習得。「古典教材ライブラリー」を人間国宝山本邦山氏・吉崎克彦氏と収録、現在まで59曲発売。ソロCD「今に生きる古典の世界」全8集、「芦垣美穂演奏集～宮城道雄を謳う～」全6集(芸術祭参加作品)それぞれ収録、発売中。現在、京都にて中澤真佐師に師事、柳川流三絃を習得中。宮城会大師範、森の会会員、一穂会主宰、名古屋音楽大学客員教授。



石垣清美 (箏)

5歳より生田流箏曲を学び、後に沢井忠夫に師事。'77年初代石垣征山と第1回箏・尺八ジョイント・リサイタルを開催以来、国内外各地で回を重ねる。平成元年度「石垣清美 箏独奏会」、平成3年度「石垣征山・石垣清美 ジョイント・リサイタル vol.5」の成果により、それぞれ文化庁芸術祭賞を受賞。コロムビアCD「石垣清美 箏・十七絃の世界」「沢井忠夫デュオ作品集」「石垣清美・沢井忠夫をうたう」他発売。現在まで神奈川フィル、山形フィル、東京フィル、アンマン交響楽団などと共演。洗足学園音楽大学客員教授、沢井箏曲院教授、邦楽音心会主宰。NHK邦楽技能者育成会、京都女子大学卒業。



野澤佐保子 (箏)

現代箏曲を福永千恵子、地唄箏曲・組歌を芦垣美穂の各氏に師事。NHK邦楽技能者育成会、現代邦楽研究所修了。NHK邦楽オーディション合格(箏・十七絃)。名古屋大学文学部卒業。賢順記念全国箏曲コンクールにて第一位の賢順賞受賞ほか受賞多数。現代の作品を中心に演奏活動を展開、箏歌の作品にも積極的に取り組む。新作初演、CD制作参加、ラジオ出演多数。また、邦楽の普及を目指し演奏団体を設立する等、後進への教授活動にも力を注いでいる。洗足学園音楽大学講師、現代邦楽研究所講師、桐生大学附属中学校講師。



吉原佐知子 (十七絃)

東京芸術大学邦楽科生田流箏曲専攻卒業。NHK邦楽技能者育成会第43期卒業。現代邦楽研究所第1期卒業。同所にてビクター邦楽技能者育英賞受賞。全国高校生邦楽コンクール準優賞。賢順記念全国箏曲コンクール銅賞、奨励賞受賞。NHKオーディション合格。2010年、旧東京音楽大学奏楽堂にてリサイタル開催。2015年、全曲ソロのリサイタル開催(文化庁芸術祭参加)。現在、各地で演奏活動、演奏指導、邦楽ワークショップを展開。洗足学園音楽大学講師、現代邦楽研究所講師、東京都市大学等々力中高等箏曲部講師。



青木彰時 (尺八)

琴古流尺八を父二代青木鈴慕(人間国宝)に師事、92年文化庁芸術インターンシップ生、95年第1回リサイタルを開催(以降7回開催)、01年曠の会結成、2枚組CD「曠」発売、06年東京藝術大学非常勤講師(06-08年、10-12年、14年～)、14年「創造する伝統賞」受賞(日本文化芸術財団)、現在(公社)日本三曲協会常任理事、琴古流協会常任理事、東京藝術大学非常勤講師、洗足学園音楽大学講師、琴古流尺八鈴慕会副会長、現代邦楽作曲家連盟会員、曠の会同人。



鶴澤久 (シテ 融大臣)

観世流シテ方能楽師準職分。昭和24年(1949)生まれ。父は観世流職分・鶴澤雅。父および観世寿夫、八世観世銜之丞に師事。三歳で初舞台。仕舞「猩々」。十三歳初シテ「吉野天人」。「石橋」、「道成寺」、「卒都婆小町」、「鸚鵡小町」を披曲。銜仙会を中心に舞台活動中。能のワークショップや海外公演、現代演劇への出演など、数少ない女性能楽師として精力的に活動している。重要無形文化財能楽総合指定保持者。公益社団法人銜仙会理事。一般社団法人日本能楽会会員。東京芸術大学邦楽科、同大学院修了。立教大学非常勤講師。川崎市文化賞授賞・川崎市文化大使。



八反田智子 (箏)

能楽箏方一噌流。国立能楽堂第五期研修生。一噌仙幸に師事。平成11年「羽衣」にて初舞台、平成16年「乱」、平成18年「石橋」。公益社団法人能楽協会東京支部会員。



大山容子 (小鼓)

大倉流小鼓方。昭和56(1981)年生まれ。聖心女子大学文学部卒業。平成17年大倉流入門。同年舞囃子「小袖曽我」にて初舞台。大倉源次郎に師事。公益社団法人能楽協会東京支部会員。



佃良太郎 (大鼓)

1981年生まれ。東京芸術大学卒業。人間国宝 安福建雄、柿原崇志、父 佃良勝に師事。公益社団法人能楽協会東京支部会員。公益社団法人能楽協会 東京支部会員。



小寺真佐人 (太鼓)

1977年(昭和52年)9月11日生。能楽協会会員。観世流太鼓方職分。父、小寺佐七及び観世元信、観世元伯に師事。東京芸術大学邦楽科卒。初舞台10歳、独鼓、鞍馬天狗。今までにH13石橋、H14乱、H17道成寺、H17鷲などを披く。ヨーロッパ、アジア、アメリカなどの海外公演に参加。平成20年 能楽普及公演 七拾七年会を発足する。



西村高夫 (地謡)

観世流シテ方、公益社団法人鏡仙会理事、公益社団法人能楽協会会員、社団法人日本能楽会会員／重要無形文化財総合指定、埼玉県立浦和第一女子高等学校能楽部講師、響の会同人、蒼諷会主宰(素人会)。1972年早稲田大学観世会にて山本順之の指導を受ける。1976年鏡仙会に入門し、故観世寿夫師、故八世観世鏡之丞師、九世観世鏡之丞師に師事、能のシテ方としての修行を始める。1978年〈土蜘蛛〉のトモで初舞台。1980年〈羽衣〉で初シテ。1982年に独立し、現在鏡仙会の中堅筆頭格として活躍。世阿弥座などの海外公演にも多数参加。1991年清水寛二と「響の会」を結成。1992年第2回本公演で〈道成寺〉を披く。2006年1月出身の小千谷市にて「震災復興祈念小千谷能」を企画、小千谷市及び地元有志による実行委員会の主催により上演。同年4月には「第17回響の会」にて14年ぶりに〈道成寺赤頭〉を再演し好評を博した。筑波大学能・狂言研究会、埼玉県立浦和第一女子高等学校能楽部等で指導を行う。2004年重要無形文化財総合指定。日本能楽会入会。



鵜澤光 (地謡)

祖父故鵜澤雅、鵜澤久、浅井文義、九世観世鏡之丞に師事。2002年東京芸術大学邦楽能楽専攻卒業、鏡仙会入門。2007年準職分認定。初舞台1982年仕舞「老松」。初シテ1991年能「狸々」。初面1998年能「経正」。披曲2008年「石橋大獅子」、2010年「乱」、2013年「道成寺」。海外公演歴 1997年アメリカピッツバーグ大学「女郎花コンファレンス」参加、2001年ノルウェー公演参加、2007年アメリカカナダ四大学公演参加、2009年アメリカPhillipsAcademyAndoverにてワークショップ、2013年アメリカピッツバーグ大学、オハイオ州立大学にてワークショップ。洗足学園音楽大学講師。2015年中国南京にての朱鷺芸術祭に於いて佐藤信氏演出の現代演劇「駅」出演。公益社団法人能楽協会東京支部会員。



青木健一 (地謡)

シテ方観世流能楽師・観世流準職分・(公財)梅若研能会所属・(公社)能楽協会会員・東京芸術大学邦楽科助手。明治時代より能を伝承する青木家の四代目として昭和57年に生まれる。4歳にて初舞台を踏み、数多くの舞台に出演。平成17年東京芸術大学音楽学部邦楽科能楽専攻を卒業後、3世梅若万三郎師に入門。平成23年観世流準職分に認定。平成24年梅若万三郎家を独立、同年能楽協会に入会。多く公演出演の一方、能の普及に尽力し、在住する吉祥寺で父一郎と共に開催する能学塾は役者と観客の架け橋として重要な役割を果たしている。



森重行敏 (司会)

東京芸術大学楽理科卒業。小泉文夫教授の影響により日本をはじめとするアジアの音楽に関心を持つ。学生時代にガムラン演奏グループの結成に参加。1985年こどもの城の開館時に合唱、邦楽、ガムランなどの講座運営に携わる。1995年現代邦楽研究所の開設にあたり授業系主任としてカリキュラム作りにあたる。現在、洗足学園音楽大学客員教授、現代邦楽研究所所長。



洗足学園音楽大学

ひと、音楽、未来、世界をつなぐ。

洗足学園音楽大学は、音楽の学びと実践を通じて、
豊かな社会づくりに貢献します。